

油彩画 高崎元尚「作品」の修復報告

大原 秀行、影山 千夏、フェラーリ まり子

【はじめに】

「作品」と題された抽象画家・高崎元尚の油彩画の作品は、制作されてから約60年経っており、画面全体に亀裂が入っている。さらにキャンバス地にはL字の破れが生じていて、画面全体に激しい波打ちが発生し、また多くの加筆と思われるシミも存在した。

しかし、このような症状が発生したのは、この作品が美術館に保存されていたわけではなく、作家自身が長年アトリエに保管し、作家自身の手によって加筆され近年になって作家の故郷の新たな個人コレクションに加わったためである。このような道中を通して来た傷の多い作品が、元のような元気な姿になって、今後も多くの人々に見てもらえるようにすることが我々「修復家」の使命である。

【作家について】

高崎元尚

たかさき・もとなお

1923 - 2017 (大正12 - 平成29) 年

高知県香北町(現在の香美市)に生まれる。1949年、東京美術学校(現・東京藝術大学)彫刻科を卒業。54年、モダンアート協会新人賞受賞。58年、「抽象絵画の展開」展(東京国立近代美術館)に出品。62年、濱口富治の「新象土佐派」と合流し、「前衛土佐派」を結成。63年、正方形に切り取った白いカンヴァス片を湾曲させ連続して配置する代表的シリーズ《装置》を発表する。66年、第1回ジャパン・アート・フェスティバル(ニューヨーク)への出品を機に、具体美術協会に参加。高知県展、高知市展へと出品を続ける傍らで、国内外の展覧会に出品し活躍した。95年、高知県文化賞受賞。2017年には高知県立美術館で大規模な個展が開催された。

作家活動の一方、母校である高知県の土佐中学・高等学校の教諭を長年務め、美術家合田佐和子、美術家絵本作家田島征三、絵本作家染色家田島征彦ら多くのアーティストに影響を与えたことでも知られる。

緑と朱色の2色(もしくは黒を含めた3色)を幾何学的に構成する《朱と緑》は、1950年代から60年代初め頃に取り組んだ高崎の代表的なシリーズで、本作品はその一連のものである。当初直線、矩形に描かれていた線は、次第に曲線へと展開していった。

また本作品は1993年芦屋市立美術博物館で開催された「具体展Ⅲ」の出品作である。

なお、高崎元尚の作品は彼の出身地である高知県立美術館だけでなく、京都国立美術館、宮城県立美術館、芦屋市立美術館、兵庫県立美術館、北九州市立美術館、福岡市立美術館、さらに2022年2月にオープン

した大阪中之島美術館のコレクションになっている。

【作品情報】

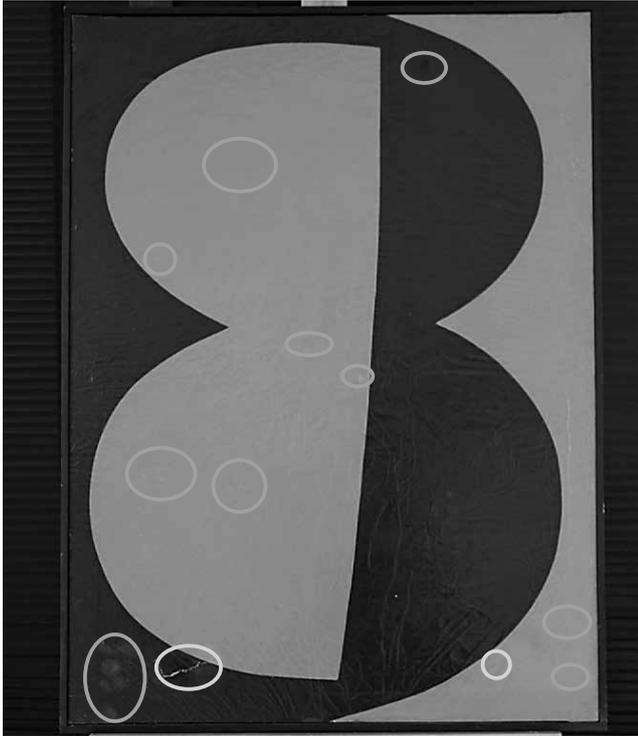
作 者： 高崎元尚
題 名： 作品
制作年： 1960年頃
寸 法： 縦116.8cm、横90.8cm
支持体： キャンバス
技 法： 油彩
木 枠： あり
額 ： あり
額寸 ： 縦119.5cm、横93.3cm
ガラス： なし
裏保護： なし

【状態】

本作品は、木枠が大きく反っており、木枠側から絵具層に向かって圧力がかかっていたため表層の亀裂が著しく、木枠の新調が望まれる状態であった。

また、作品全体に波うちや亀裂が非常に多く見られた。作品左下には大きなキャンバスの裂けがあり、右下には5cmほどの丸い凹みも確認された。左上には旧修復と思われるかけはぎの跡が見られ、色調が周囲と一致しておらず目立っている補彩の跡も数箇所に見受けられた。

裏面に関しては、上記で述べたかけはぎの跡やキャンバスの裂けなどが確認された。木枠の横棧には埃が堆積しており、キャンバス裏面も汚れている状態であった。キャンバス裏面には修復の跡と見られる四角い継ぎ跡も見られた。



○：旧補彩跡 →：キャンバスの裂け
○：凹み

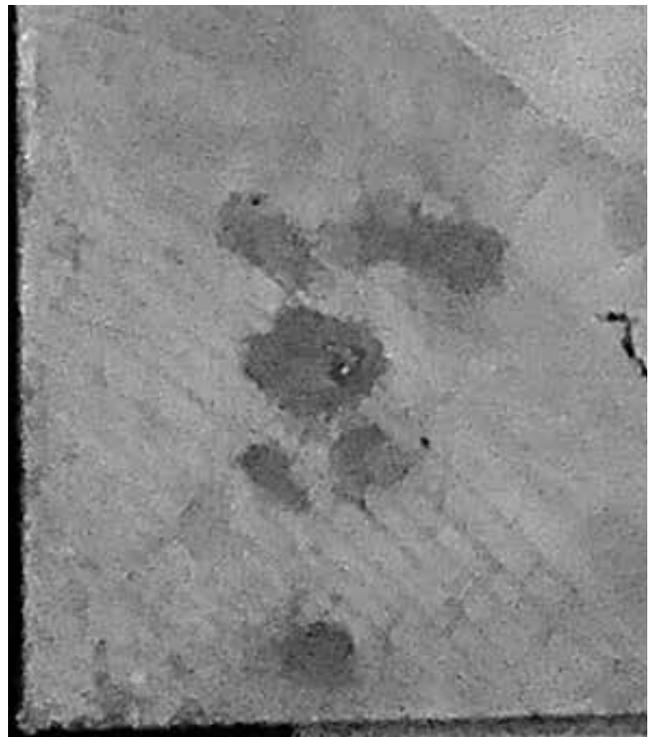


紫外線写真

→旧補彩箇所が蛍光しているのが確認できる



通常光写真
(旧補彩跡の拡大)



紫外線写真

→旧補彩跡をはっきりと確認できる



キャンバスの裂け及びその周辺の凹み



裏面全体（斜光線撮影）

→キャンバスの凹みや亀裂跡をはっきり確認できる

【修復工程】

1. 温水で湿らせた綿棒を使って、表面全体のクリーニングを行った。
(表面クリーニング：1回目)
2. 亀裂のある箇所、筆を用いて、熱可塑性接着剤である BEVA 溶液を塗布した。
3. 作品を面下にして置き、キャンバスと木枠を固定しているタックスを全て抜いた後、慎重に木枠から作品を外した。
4. 作品が動かないように重しで固定をしつつ、刷毛と専用の掃除機でキャンバス裏面のドライクリーニングを行った。
5. ホットプレスの下準備として、キャンバス表面の余計な凹凸を出来る限り軽減する必要があるため、キャンバスの耳を平らに戻し、キャンバス裏面にある継ぎ跡や古い接着剤はメス等を使って慎重に取り除いた。
6. 作品を面上に戻し、ホットテーブルを使って熱圧着して、波うちや凹みを軽減させた。使用した接着剤は 65℃ で溶解するため、ホットテーブルの温度は、それよりやや高い 68℃ に設定した。(ホットプレス：1回目)
7. 作品の支持体を強化するため、新しいキャンバスを用意し、作品全体に裏打ちを施した。裏打ち用の新しいキャンバスにはシート状の BEVA を貼り、作品裏面には、BEVA 溶液を刷毛で塗布した。その後、再度ホットテーブルを使用して、作品と裏打ち用キャンバスを熱圧着させた。(ホットプレス：2回目)
8. この段階で全体的な波うちや凹凸はかなり軽減されたものの、まだ波うちが見られたため、もう一度全体にホットプレスを行った。(ホットプレス：3回目)
9. 元々の木枠は反りが大きく、木枠側から絵具層に圧力がかかり、表層の亀裂が著しい状態であったため、木枠を新調し作品を張り直すこととした。
10. 作品表面に残った BEVA を石油系溶剤のミネラルスピリットとコットンを用いて除去を行った。この作品は表層が特にデリケートであったため、絵画表面に出来るだけ負担をかけないように、この作業を数回繰り返し、段階的にクリーニングを行った。(表面クリーニング：2～4回目)
11. 左下に見られた大きなキャンバスの破れには、ウサギ膠溶液とボローニャ石膏を混ぜたものを充填し、充填箇所と絵具層との高さが同じになるように、メスで成形を行った。
12. 充填箇所にアクリル絵具で補彩を施した。
13. 色の違いが顕著に見られた旧補彩を、アセトンで湿らせた綿棒で慎重に除去を行った。
14. 作品表面にニス(グロス)を塗布した。
15. ポリカーボネイト板でバックパネルを新調した。



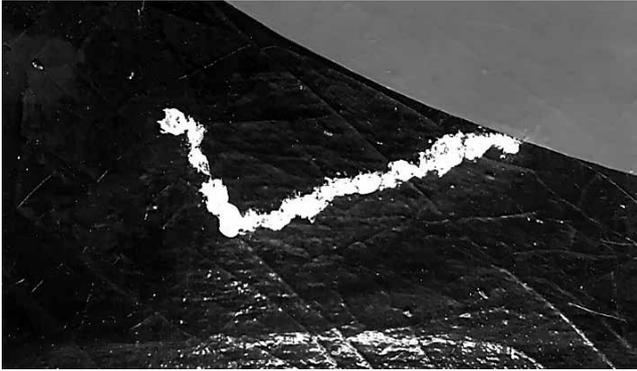
裏面クリーニング



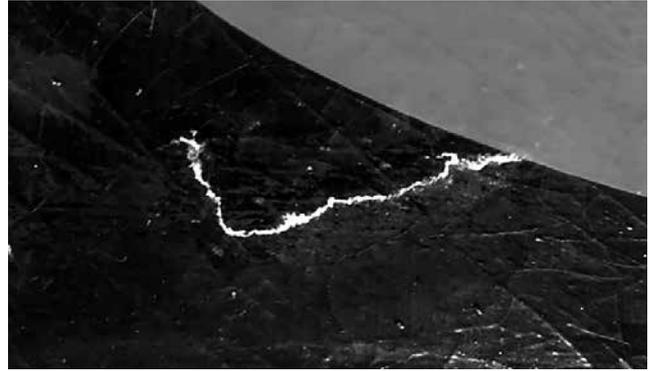
ホットテーブル上でのプレス



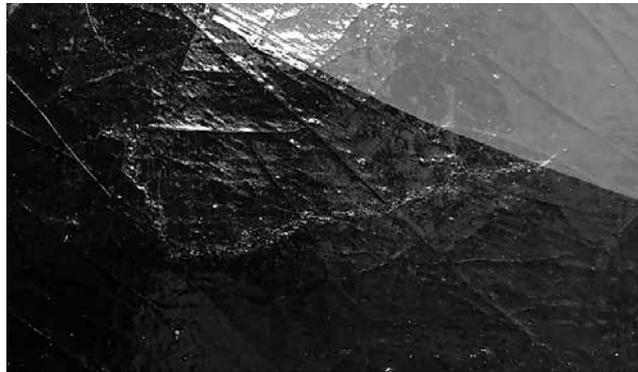
充填作業途中



充填後



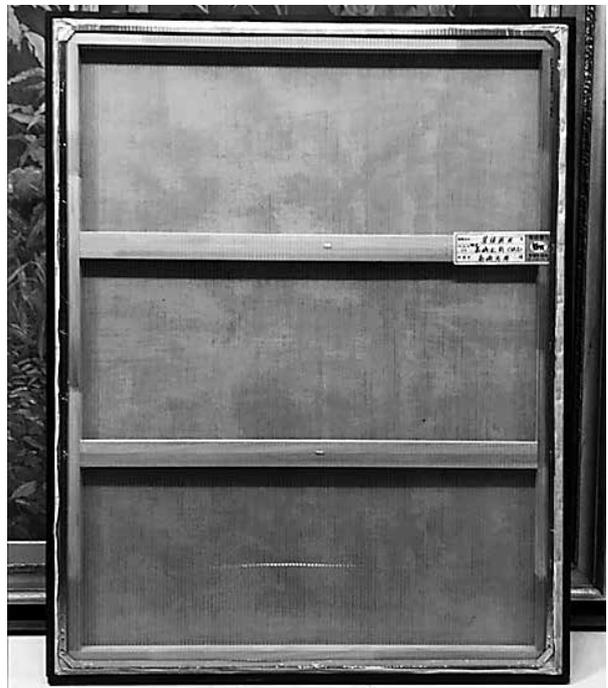
成形後



補彩後



修復処置完了後



バックパネル設置後

【最後に】

作品の修復は完了したのだが、今後出来るだけ長く作品を良い状態で保持させるためにはどうすれば良いか、透明の亚克力板の箱の中に収納したいと所有者からの提案があり、我々修復チームでも協議した。

修復された作品は、恐らくコレクターの所持する病院の壁に掛けられるものとなるだろう。作品は周辺部を黒く塗った細い板だけ覆っており、これも作品の一部と考え、確かに作品全体を亚克力板で作った透明の箱の中に収納する形が一番良い方法であろう。今後はこの作品の美的感覚を損なわずに違和感なく亚克力板の箱の中に収納するために、亚克力板の箱の大きさや箱の内部の空調の変化を少なくする方法を修復チームで考案して、所有者の元に届ける予定である。

最後に、この作品の修復報告を紀要に載せることを快く承諾してくださった、所有者である高知市の岡村病院長・岡村高雄先生に心より感謝申し上げます。